

アーカイブ 通信 No.6

No.6

2016.3.1

- ◆編集・発行：
ネットワーク・市民アーカイブ
- ◆tel・fax: 042-540-1663 (事務局)
tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)
E-mail: simin-siryu@nifty.com
www.c-archive.jp
- 〒190-0022 立川市錦町 3-1-28-301 (事務局)
- ◆正会員 1 口 6000 円、賛助会員 1 口 3000 円
ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226
口座名：市民アーカイブ

開館 2 周年
記念講演会
たちかわ RISURU ホール

5月29日(日)午後2時30分

「屈せず」に生きてきた浪江虔

—民主主義の礎としての私立南多摩農村図書館—

講師：田中伸尚さん(ノンフィクション作家)

厳しい戦時下に屈せず生きた人々から、今の時代を生きる私たちにも、示唆するものが多々あると思います。

なお、当日は講演会の前、午後1時15分から同会場です。2016年度総会を開催します。ご参加お待ちしております。

第1期 緑蔭トーク④ 報告

「3・11震災からの資料レスキューについて」

青木 睦さん(国文学研究資料館)

ともすれば市民活動資料は収集することだけに重きをおきがちですが、実際には収集した資料をきちんと保管し、管理するという側面も重要です。第1期緑蔭トークの最後に登場いただいたのは、国文学研究資料館の青木睦さん。東日本大震災や直近に起こった常総市の水害などを例にとつて、災害時の資料レスキューの事例を紹介いただきました。15年10月27日に市民アーカイブ多摩で開催しました。(文責＝編集部)

2015年9月に鬼怒川決壊によって起こった大規模水害では、常総市役所

周辺も冠水し、永年書庫に保存していた数万点の公文書が浸水被害に遭いました。この被害を受けて発足した茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク(略称「茨城史料ネット」)の呼びかけに、県や国文学研究資料館、東京文化財研究所などの専門家が50人が集まり、水損した行政文書などの救出作業に挑みます。専門家が中心的に作業に取り組み、延べ200人を超えるボランティアが参加しました。

◆リンク分けと適切な処理

作業はまず資料全体を被災のリンクに分け、救出する順位を決めます。水損していないものは現状のまま保存し、水損したものは自然乾燥

「緑蔭トーク」第2期スタート

多士済々の顔ぶれで、今年も緑蔭トークを開催します。いずれも会場は、市民アーカイブ多摩(玉川上水駅歩8分)、時間は午後4時15分～6時です。

◆第1回 4月9日(土)

「電磁波問題と私」

—これまでの運動と収集資料—
懸樋哲夫(ガウスネットワーク)

◆第2回 6月11日(土)

「砂川闘争と美術家たち」
武居利史(府中市美術館学芸員)

◆第3回 9月10日(土)

「三多摩の市民活動をたどる」
江頭晃子(運営委員 アンティ多摩)

◆第4回 10月22日(土)

「市民活動を分類する」
町村敬志(運営委員 一橋大学)



スライドを使って説明する青木睦さん(右)

市民活動サービスコーナー時代をふり返る

2016.1.11 於：一橋大学

共催：一橋大学社会学研究科市民社会研究センター

で剥離・クリーニング・補修を行います。ただ、水損して空気に触れるとカビが生えてしまふため、カビが生えたものはエタノールに浸したり、なかでも著しく劣化したものはさらに真空状態の圧縮パックに封入して冷暗保管、または冷凍したりすることによって保存します。災害時の資料救出は、このように適切な処理の方法をきちんとして検討し、実施していくことが重要になります。

こうした取り組みで、参考になったのは東日本大震災時の対応です。国文学研究資料館では岩手県釜石市の被災状況の調査を実施しました。釜石市では、市役所の地下文書庫の行政文書が津波によって水損し、直後はライフラインの復旧もままならない状況でしたが、2か月後に市の要請を受けて、1年間の救助・復旧活動を開始。活動では最初の2か月で被災文書リストを作成し、検索のための電子化を被災から1年経った12年3月までに完了。4月から文書の活用を可能にしました。

◆地域の協力を得ながら

作業をスムーズに進めるためには、前述のような資料救出のための作業手順のマニュアル化が重要になります。また、救出、保存、管理のそれぞれの局面ではアーカイブズ学だけでなく、歴史学、保存科学など多くの専門職が関わる必要があります。こうした多くの専門職の関わりをなかで、より効果的に、効率的に活動を担う道筋を見出していきます。たとえば災害時の救出活動は限られた設備のなかで取り組む必

要がありますが、きちんとした中性紙封筒での保管法をとらなくてもクラフト紙で資料を包むだけでも充分劣化を防げることがあるのです。

もちろん、こうした資料を救出する役割を担うのは専門家だけではありません。実際の資料を扱う自治体、地域の協力は欠かせません。彼らの置かれている実情や心情に寄り添っていき、必要があります。そして、この救出された資料こそが、次の災害時に役立つ資料と

◆参加者の感想から

なり、活かされていくはずなのです。

- ・阪神淡路大震災から東日本大震災、常総の水害と、大きな災害があったのは大変なことだけれど、その中できちんと教訓を生かし、次世代に残していく努力に頭が下がります。災いを転じて、という言葉、全くその通りと思います。
- ・初めて聴いた内容ですが、現場で活躍された専門家のお話は迫力がありました。
- ・具体的に参考になりました。

「ネットワーク・市民アーカイブ」の前身である「市民活動資料・情報センターをつくる会」が発足したのは06年。今年10周年を機に、「シリーズ“原点”から考える」をスタートしました。

第1回は、当会が資料保存のために動きだしたきっかけでもある、東京都の「市民活動サービスコーナー」(以下、「コーナー」)事業をテーマにし、その全体像とコーナーの記録した資料の現在について3つの報告をしていただきました。

市民活動サービスコーナーの活動

山家利子(運営委員、元コーナー職員)

コーナーは72年10月、東京都が革新の美濃部都知事であった時代に、知事の「主権者意識涵養

のための施策」という指示で、始まった事業です。「東京都立川社会教育会館」(当時)に非常勤職員「社会教育指導員」が充てられ始まりました。

各地で公害反対運動が盛り上がる時期でしたが、行政による市民活動へのサービスは、発足前から矛盾が予想され、結局コーナーは、最後まで行政内で安定的な位置を保持せず、石原都政の下、02年3月で事業廃止となりました。

事業内容は、以下の3つでした。①「情報資料の収集・提供」は、「市民活動サービスのための図書・資料の提供」であり、「市民活動が生み出す資料の収集」は開設の少し後で意識されるようになっていきました。②「活動支援」

は、コピー・印刷機サービスや、「交流の機会の提供」などでした。印刷機器的提供は好評で、自分の町の公民館に働きかけて設置をさせる団体もありました。「交流の機会」として「市民活動交流のつどい」を年1〜2回開きました。これは同じ課題に取り組む市民どうしが連携していくきっかけをつくることになりました。③「相談」は電話相談と「講師派遣事業」で、後者も好評でやがて多摩地域の公民館事業として拡がっていきました。

これらの事業を行う職員は、非常勤(最多時4人)で、1年契約で労働条件は悪く、発言権も弱かった半面、異動もなく、都職員としての研修もなく、コーナー一筋に仕事が出来ました。

利用団体は、サークルから住民運動まで多様でした。利用者自身が「利用者交流会」「守り発展させる会」という団体をつくり、コーナーの充実や危機回避のために取り組みました。

事業運営で大切にしてきたことは、①「求めに応える」市民活動(団体)が活動上必要とする点には、主力で応えますが、行政側から先取りしてサービスを行いません。②「サークルから市民運動まで」多様な団体に分け隔てなくサービスを行います。公民館には、「学習」を狭義に捉え、運動系の団体が利用できないところが当時は少なくありませんでした。③「活動の学習的側面にサービス」当時は市民活動の枠を狭めるものとして捉え



い資料保存機関的視点に陥りがちです。コーナーの経験を当会にどう活かすか、改めて考えていきたいと思えます。

コーナーの利用者として

荒井容子（運営委員、法政大学）

私は81年4月、大学4年生の時に初めてコーナーを訪れました。東村山市での公民館づくり運動について調査を始め、その報告を聞くために参加した研究会で中央大学の奥田泰弘先生にお会いし、誘われてコーナー利用者連絡会の総会に参加しました。10名前後の参加で拍子抜けでしたが、早速世話人になりました。当時コーナーがあった立川社会教育会館の改築が予定されており、コーナーの価値をアピールする集会を企画し、そのポスターに市民活動支援の多面的な活動をイラストにして描きました。青刷用の版下を今も持っています（当日、提示）。

その後コーナー所蔵の資料にも関心を寄せてきましたが、当時特に印象深かったのは「交流のつどい」でした。子どもの遊び場が関係した「つどい」では、空き地を活用して自由に遊ぶ場をつくっていた「原っぱの会」などの報告があり、若いお母さんたちの芽生えたばかりの活動を他の運動とつなげていく役割を

果たしていたように思います。また80年前後の施設づくり運動

や市民参加隆盛の一方で、公民館・コミセン論争や、「民活」民営化政策も登場し、社会教育施策には、施設使用料有料化問題も起き、各地で「社会教育を考える会」等の市民団体が生まれていました。コーナーはその動きに注目した「つどい」も企画し、十数団体が一堂に会しました。「つどい」を企画できたのは、団体を支え、各団体の「ニュース」等を収集するなかでの情報把握があり、かつ、それらの団体をつなぐ意義を意識していた故のことだと思えます。

『大原雑誌』666号（14年4月）特集「市民活動・市民運動と市民活動資料、市民活動資料センター」で、私は「市民活動資料センター」と市民運動を支える社会教育」について論じました。ここで改めて当時、『広場と青空の東京構想（試論）』（71年）の「市民運動」への高い期待や東京都社会教育委員の会議の答申「市民教育のあり方」（73年）での「市民運動の教育的価値」の強調があったことはもとより、すでに65年の『東京都社会教育長期計画』でも都民を主体とする社会教育の考え方が提示されていたことを確認しました。ようやく芽生え始めた、社会教育を権

利としてとらえる思想の影響を感じ取りました。

市民アーカイブ多摩はコーナーとはちがいが、まさに市民運動そのものですが、このような歴史を引き継ぎ、市民運動を支えるという目的を自覚していくことが必要だと思います。

コーナーの資料群とその整理

長島祐基（橋大学大学院）

コーナーから続く40年以上にわたる市民活動サポーター、市民活動資料収集／保存活動に関わる資料のうち、収集資料や活動の内部資料については大原社会問題研究所や市民アーカイブ多摩等で保存され、収集資料は公開されています。

他方、コーナー事業の運営実務資料数十箱が紆余曲折を経て現在、市民アーカイブ多摩を始めいくつかの個所で未整理のまま保管されています。この資料は東京都が保存指定文書としてこなかった日常業務文書です。資料収集を含めた市民活動サポーター事業が、当時の市民活動の中で果たした役割を検証する上で大切な文書とも言えます。

しかし、この資料は東京都が廃棄した元公文書であるという文書の性質の問題や、未整理であるため具体的な価値がわから

ず、利用も出来ないという問題を同時に抱えています。そのため、現状では残すことが非常に難しい資料でもあります。このうち、未整理であるため価値が分からないという点は、具体的に残されているものを調査、整理し、目録を作成する中で資料の価値や残す必然性を明らかにすること、価値を認めてくれる人を獲得することを通じて改善していけると思います。

14年8月13日に一部の資料（4箱分）の試行調査を行いました。90年代の運営資料、冊子編集資料、集会資料などが含まれていました。特徴としては詳細な日常業務記録が残されていること、基本的にファイルで綴じてあり、整理がしやすいこと、研究価値も非常に高いことが挙げられます。

他方で、整理やその後の保存、公開に関する問題点も明らかになって来ました。整理の問題として挙げられるのは、図書館の十進分類に近い市民アーカイブ多摩の現在の分類方法では内部資料を整理することが難しいこと、多くの資料を集めて整理を行う場所と人員が十分に確保できていないことです。加えて、整理をしても、長期的な保存や資料が痛んだ場合の修復の問題といった保存の問題があります。また、民間に渡った元公文

ていきましたが、現在ではむしろ活動における学習的視点・学ぶこと・広い視野で自分たちの活動を振り返ることの重要性を、当時とは逆の意味で感じます。30年間の事業で生み出したものは、①設置目的である市民の活動の充実発展、②市民活動資料のモノと収集・整理のノウハウの蓄積、③団体・人の多様なネットワークの形成、④市民活動団体（人）や資料に対する「敬意、好意」。特に活動している人たちの真剣さ、無私、粘り強さなどには頭が下がりました。その中で形成された「敬意、好意」は今考えると、団体（人）の信頼を得ることと可能になる仕事の土台になっていったと思えます。

市民アーカイブ多摩では目前の運営に気を取られすぎて、つ

書を公開するのは難しいという問題もあります。公文書は本来行政機関内で保存、公開されるのが原則であり、民間に原本が渡り、公開されることを前提としていないからです。

こうした問題を踏まえた上で当面出来ることとしては、①内々で資料の調査を行い、箱ごとに簡単な目録を作る、②収集資料などが含まれていた場合は既存の整理体系で整理、配架して分量を減らす、③目録レベルで全体を把握する、④定期的に資料の中身に関する研究会を開き、利用可能性を探るという4

点が挙げられます。

コーナーの資料は元公文書ですが、同時に多摩地域の市民活動が緩やかにつながりながら歩んできたことを示す、市民の活動記録としての側面もあります。難しい点もありますが、日本の市民社会の一端を示す重要な文書として残していく意義は十分にあると言えるでしょう。

質疑応答

——コーナー事業は「求めに応じる」というのが活動の肝だったようですが、市民の方々は何を求めているのでしょうか？

山家：行政が用意したサービス提供をしつつ、市民の反応を見て次を考えることの繰り返しでした。「交流のつどい」で印象に残っているのは、「集ましよう、三多摩の女たち」で、各地から女性たちが集まり、その後ネットワークが出来て運動に発展したことです。

——コーナーが廃止されたのは、社会教育の変化や危機とも連動しているのでしょうか？

荒井：公民館については、70年代は各地で新規公民館も増え、東京都公民館連合会（都公連）は勢いがありました。その時に

私と活動4 市民資料

1枚のちらしからの展開

佐藤啓子

当会の杉山氏が常日頃言っている「1枚のちらし、1つのミニコミが無限の可能性を拓く」ということを、体験したことがある。そのことは、ずっと忘れていたことだったが、市民アーカイブ多摩のボランティアを始めて数ヶ月の時、1つのミニコミを見て瞬時に思い出が蘇った。

□懐かしいミニコミとの再会

そのミニコミは、単発の1〜2号のみのニュースレターでファイルにはなっていないかった。見覚えのあるレイ

アウト、懐かしい人たちの名前。活動を始めたばかりの施設で、重度の障がいのある人たちの試行錯誤の活動の様子。私自身の名前もあった。懐かしく、充実した活動との出合いは、そのニュースレターが発行される1年程前にかかのぼる。

□ボランティアから始まって

住まいに近い、名称が世紀を表す不動産屋の、新聞に入っていた折り込みチラシに載っていた「耳より情報欄」。確か、1つは簡単なおやつ作り方。2つ目は、ボランティア

ア募集で、内容は「障がいのある人と一緒にプールに入りませんか？」というような文言だったと思う。

ちょうど、末の子どもが幼稚園に入園し、わずかな自分の時間がやりくり出来たので早速行ってみた。養護学校（現在の特別支援学校）を卒業したばかりのハンディのある男女1人ずつ、職員2人とボランティアの私の計5人で、週1度、プールで一緒に泳ぐのだった。もともと、泳ぎは嫌いではなかったのに、大変だったのが楽しかった。そこでは色々なことを教えてもらい、後にはパートで勤めることにもなるのだが、通所者は若い人が多かったが、同世代

比べると、社会教育行政全体から大事なものが次々に失われていった流れの中にコーナーの廃止もあると思います。

——都と市町村では分業が必要だと思います。収集資料は、市町村を經由して、コーナーにきたのでしょうか？

山家：資料収集は基本的には団体から直接きました。市町村の公共施設等に行つた際に職員が資料を収集し、その後その団体に依頼して送られてくることはありました。

——コーナー時代に収集された資料の分類はどうなっていますか？

や高齢者の方もいた。

その施設は、多くがそうであるように、保護者が自分たちがいなくなった後、どこに子どもたちの生活の場を保障する？という問題意識から作られたばかりだった。私が関わっていた時に「きょうされん」の運動、「あさやけ作業所の活発な活動を耳にしたり、20代の女性通所者は世田谷の自立センターで訓練を受けに行っていた。そんなことが一気に思いだされた。

□人間の生き方を縦断しつつ

当時は障がいの者の自立運動が盛んになり始めた80年代後半。ミニコミを見ながら懐かしさを感じると共に、当時

すか？ 今は、あえてNDC（日本十進分類法）ではない図書館もあるようですが。

山家：独自の分類を作って使っていました。市民アーカイブ多摩でも改訂しながら同じものを使っています。

中村（運営委員）：アーカイブズにはISAD(G)と呼ばれる国際基準の分類を求めようとする試みがあります。全国歴史資料保存利用機関連絡協議会が発行する「記録と史料」や、日本アーカイブズ学会の会誌を参照してください。

の運動の重要性を再確認した。同じ分野で活動する他団体のミニコミも一緒に並んでいることで、それぞれが相互作用的に運動を展開していたのだな、ということも再確認。

その後の私は高齢者の仕事をすることになり、今に至っている。市民アーカイブ多摩の様々なジャンル、分類の欄を見ていると、1人の人間の人生を縦断しているような感じがする。当時は20世紀を謳っていた不動態屋の名前は21世紀となり、不動態屋の若い職員が作ったチラシが私にとって大きな意味をもつたことに感慨を覚えるのである。

（運営委員）

ミニコミ紹介

市民アーカイブ多摩で所蔵する団体や個人が発行する会報・通信(ミニコミ)を発行者の方に紹介していただきます。

であい

『であい』は国分寺難病の会の会報として発行しています。

突然難病を宣告された私と難病者の家族と看護婦の3人が出会い、難病を皆の問題と捉え活動する会を作りたいと、1年かけて練り上げ「難病の会」を立ち上げました。難病のある人もない人も健康な市民も、ともに難病を軸に活動する会と、設立総会で発表したことで、全国的にも珍しいと新聞6社が取材記事を掲載したことなど『であい』創刊号は設立総会の熱気に満ちた記事で満載でした。

ひとりでは抱えきれない悩みや介護問題を、皆で語り合う場として、会報発行と出合いの場を作ることを柱に活動を開始。

- ・創刊1992年、600部、A4判、8~14頁、年3回、1部100円
- ・問合せ：国分寺難病の会
Tel 090-8043-7434
- ・当資料館所蔵：58~88号
- ▽87号内容=副市長就任にあたって、1月から施行された難病関連の2つの法律、言語教室の現況、障害者週間記念講演を聞いて、新年のつどい・忘年会・学習会報告、東京都難病相談・支援センター講演会・相談会、各種催し案内、編集後記他



当時は難病への偏見があり、難病に罹患したことを恨み、悲しみ、隠して孤立している人たちが多く、どう声かけするかが悩みでした。市の登録者名簿は借りられず、市報に記事を掲載し、各集会施設に会のしおりを届けるなどして、会員80人余になりました。

無事1周年を迎え公民館ホールで講演会を開催。3周年は市民の歌の会を招いて、一緒に歌う楽しいひと時を、記事と写真で飾りました。5周年は全会員アンケート調査を実施、まとめを『住みなれた地域とともに生きたい』として冊子を発行、市の障害者福祉実態調査の参考資料に活かされました。

難病者にとって、かかりつけ医と、専門病院と保健所の輪は欠かせないことから、連載「保健所の今」を都の保健所再編が収束するまで継続しました。

51号から57号まで新入会員向け「難病の会のあゆみ」を連載。2000年夏「難病看護学術会集会」へ参加。難病を支える看護介護の仕組みを学習。各自感想文

交流に努めました。

03年4月公設民営の市立障害者センターが開館。難病の会主催の「言語リハビリ教室」を障害者センター会場で行いました。また全市民対象の「笑い」の会を4年連続開催して、市民と出合い親睦を深めています。

がうす通信

1993年5月、甲府で「高圧線問題全国ネットワーク」が結成され、そのニュースとして発行を始めたのが『がうす通信』です。主に電磁波問題を取り上げることが目的でした。毎年6回隔月に発行し続け、今年2月で137号になりました。会員約500人に郵送しています。

甲府にリニア実験線が建設される、ということから電磁波問題に注目したのがきっかけでしたが、高圧送電線や変電所建設の特集号としました。

或る日、住民図書館館長丸山尚さんから「都の市民活動サービスコーナーで『であい』を発見、できれば創刊号から寄贈されたい」との要望を受け、寄贈しました。その後住民図書館の蔵書は埼玉大学共生社会教育研究センターへ移管された由。両者より通知を受けて了承。ミニコミ誌が大切に扱われていることに感謝(後に立教大学へ)。また、他団体との交流に努めました。

03年4月公設民営の市立障害者センターが開館。難病の会主催の「言語リハビリ教室」を障害者センター会場で行いました。また全市民対象の「笑い」の会を4年連続開催して、市民と出合い親睦を深めています。

交流に努めました。

(山内佳江)



も盛んな時期でしたので、その課題で全国から賛同者が集まり、数年後には会員は1000人を超えました。2000年を過ぎた頃から、次第に携帯電話が普及し始め、「脳腫瘍になる?」といった懸念から電磁波問題がさらに広がっていきます。

当時の世の中にはパソコンもなく、ワープロを使い始めたころでした。その後、電子機器の爆発的普及で電磁波環境は激変していきます。インターネット時代となり、健康影響の検証もないまま携帯やパソコンを誰もが使用するようになって、情報が氾濫し、わずかな海外のニュースなども埋もれてしまうようになりました。このような

現実に来る限り巻き込まれないように務めてきました。「紙のニュース」発送にこだわり、ホームページで流すより先に紙に印刷したニュースを送るようになっています。そのためか長年の会員などは強くつながっている実感があります。

「電磁波問題」はごくたまにマスコミでも報じられることがあり、そんなときは事務所の電話が鳴りっぱなしになることがありました。が、だいたいテレビでは1局1度きりで終わることが多く、後にはほとんど報じられない、という実態でした。3・11以前の原発の問題よりもっと情報が少ない課題なのです。そのマスコミに出ない問題の部分を特に表に出すように心がけています。

エネルギー問題としても大量に発電し送電するシステムが環境破壊の根源です。エネルギーの地産地消をめざす意味でも高圧線は不要ということを訴え、さらに巨大な科学技術のもたらす弊害について検証する手段として『がうす通信』の発行を続けていきたいものと思っています。

◆第2期緑蔭トーク①

4月9日(土)午後4時15分

「電磁波問題と私」
懸樋哲夫(ガウスネットワーク)

内灘町歴史民俗資料館「風と砂の館」

―戦後初の基地闘争・内灘闘争を伝える

内灘村

かがみにむかって
かみの毛を切った
内灘だ村の写真の上へ
かみの毛がどすんとおちた
ばくだんのように

(小・6 角田初江)

「内灘」とか「内灘闘争」とか聞いても、60年も前のことで、もうピンとこない人が多いかもしれない。日本海に面する石川県の砂丘を舞台に取り組まれた内灘闘争は、戦後初の全国的な基地反対闘争と言われている。

◇内灘闘争とは

1952年、在日米軍は朝鮮戦争を背景に、日本での砲弾試射場の提供を要求し、同年9月、政府は内灘を候補地に決めた。地元住民は猛反発、当時の村長、村議会を含む村ぐるみの反対運動が起こった。しかし、53年3月から試射が始まり、政府は試射場の永久使用を決めた。住民は陳情や座り込みを

繰り返して、政労働組合、学生、知識人の支援の輪も広がり、全国的に注目される基地闘争に発展。運動の高揚期には、金沢の兼六園で1万人の「基地反対国民大会」が開かれ、その後金沢市内でデモ行進が繰り返されたという。

運動はその後、条件派の台頭などにより次第に下火になったが、この運動は、その後にく砂川(東京)や北富士(山梨)の基地反対運動に、大きな影響を与えたとされている。その後、朝鮮戦争の停戦もあって、試射場の土地は57年に返還された。

内灘闘争は、私の高校・浪人生の時代にあたり、当時、新聞記事や雑誌での知識人の報告などによって、この闘争のことを知った。冒頭にあげた小学生の詩は、もはや出典も明らかでないが、当時感銘を受けて記



資料館外観

録しておいたものである。

◇ムシロ旗、鉄板、激励文も

その内灘闘争の資料を多数所蔵し、展示している内灘町歴史民俗資料館「風と砂の館」を昨秋訪問。金沢駅から北鉄浅野川線に乗り20分で内灘

駅着、タクシー10分で同館へ。館内は4つの展示室に分かれていて、「内灘闘争」は第2展示室である。壁面は、最初の説明文に続いて、年月を追ってパネル写真で闘争の経緯が分かる。

陳列されている物で目につくものの1つは、「金は一年土地は万年」と書かれたムシロ旗である。この言葉は当時、広く知られるところとなったが、札束で頬を叩くようなやり方は今も変わっていない。もう1つ目につくものは、鉄板である。当時内灘駅から海岸に向かう道路は砂地で、車も人も通行が思うに任せなかったの

で、砂の上に鉄板を敷いて、その上を行き来したという。それで、道路は「鉄板道路」と呼ば

れていたようだ。

中央の展示ケースの中には、闘争に関する記事の載った本や雑誌、各種行動の呼びかけのビラや運動側の嘆願書、応援団体からの激励文から訪問者の名刺の束などが陳列されている。

◇役場や図書館とも一緒に

目録としては、『内灘闘争資料目録』が刊行されていて、そこには2706点の資料が掲載されている。展示室に展示されていないものは、一部は同館の収蔵庫に、他は近くにある町役場の書庫に収められていて、閲覧の希望があれば見せてもらえる。また、現物ではなくコピーでいい場合は、近くにある町立図書館にもある。町立図書館の郷土資料コーナーには、製本されて背に『内灘闘争』と書かれた資料が21冊並んでいた。他に、県立図書館の雑誌からコピーしたという『内灘闘争』に関する雑誌記事というファイルが10冊あった。

◇まだ終わらない内灘闘争

利用者は研究者、ジャーナリストの取材、地元小学生の見学などあるが、数はあまり多くないようだ。もったいないことである。内灘闘争の始まった52年には在日米軍基地面積の約9割は本土にあったが、その後本土の基地は縮小撤退が進み、代わりに沖縄への集中が進んで、現在では米軍専用施設の約74%が沖縄県内にあるという。『内灘闘争資料集』の編集に携わった橋本哲哉氏(金沢大学名誉教授)は、「沖縄の基地問題が解決しない限り、内灘闘争は終わらない」と言っている(『朝日新聞』2015.7.4夕刊「あのときそれから」)。(平川千宏)



展示室

内灘町歴史民俗資料館「風と砂の館」

- ・所在地：〒920-0264 石川県河北郡内灘町 字宮坂に455 Tel&Fax:076-286-1189
- ・入館料：200円、団体150円(20人以上) 高校生以下無料
- ・開館時間：10時～17時
- ・休館日：火曜日、年末年始

※あなたのまちの資料館情報をお寄せください。

今は昔、日本各地に「女性センター」が出現した時期があります。日本政府が「女性差別撤廃条約」を批准し(85年)、男女雇用機会均等法が施行されました(86年)。「女の時代」とも言われた80年代。ある種の「黒船襲来」だったわけですが、完成した希望の女性センターには必ず図書室や資料室(時には図書館!)が備わり、女性関係資料を収集し、ところによって資料担当の専門職員も配置されました。時は下り、今や「女性センター」の名を残す施設は、とても少なくなりました。多くは「男女共同参画推進センター」と改称し、資料収集の予算は削減、中には立派な図書館がなくなつた地域もあります。そのような現在の状況下での市民アーカイブ多摩・分類番号33番(女性)の棚をご紹介します。現在98紙・誌が並びます。

◆華やかにりし時代

筆者が女の問題を最初に意識したのは、高校生時代(60年代後半)にボーヴォワール『第二の性』を読んだ時です。大学では学園闘争と同時にウーマン・リブに遭遇しました。田中美津氏のインパクトと言ったら!

当時創刊された女性問題の雑誌『あいら』(72年創刊、2012年に334号で休刊、BOC出版)は東京本部と全国の支部が回り持ちで発行を続けていま

市民アーカイブ多摩の資料棚から③ 〈女性〉

た。当館には読者寄贈で創刊号から相当数が揃います。「女の時代」華やかにりし90年代まで、毎年夏の恒例、国立女性教育会館主催講座に参加。自治体職員が多数、ジェンダー研修で来たりして、どの雑誌・ミニコミもよく売れたものです。著名なフェミニストの個人誌から地方のグループが出す雑誌まで、まさに百花繚乱。そんな



な中でも発行部数が多い有名な雑誌は、「ミニコミ」というより「メディアコミ」と称されました。

◆ロングランの総合誌

『あいら』と並び、その代表格だったのが『くらしと教育をつなぐWe』(フェミニックス、92年に『新しい家庭科WE』から引き継ぐ)、今年で200号を超えま

ルの高い内容(講演録、座談会、インタビューなど)が特集として巻頭を飾ります。有名な主婦投稿誌の編集長だった田中喜美子さんが92年に創刊した季刊政治雑誌『ファム・ポリテイク』(グループわいふ)は、それまでの女性誌とは異なる政治的視点を持つ特筆すべきミニコミでしたが、残念ながら2010年に終刊しました。市川房枝記念会『女性展望』(54年創刊)はロングランの極致。日本女性学習財団『WeLearn』も『女性教養』の時期から月刊発行、学びの視点から女性問題を掘り下げています。タブロイド版の『ふえみん』(46年創刊、ふえみん婦人民主クラブ)も月3回発行で多様な女性関連記事を掲載し、3100号を超えました。

◆官民それぞれ発行 地域女性紙

生活する地域で女性運動をすすめるには、エネルギーが必要です。『ふいふてい』(八王子手をつなぐ女性の会)、『こがねい女性ネットワークニュース』、『多摩の女性』(多摩女性ネットワーク・終刊)、『みたかの女性』、『むさしのふじん』などなど、地域でつながるからこそ意味があることを教えてくれます。これまた80年代からこの自治体でも発行し始めた女性向け広報紙も多摩地域を中心に揃っています。『まなこ』(武蔵野市)、『たまの女性』(多摩市)、『ライツこくぶんじ』、『コーヒー入られて』(三鷹市)、『かたらい』(小金井市)、『スクエア21』(府中市)、『アイム』(立川市)、『ひらく』(小平市)、『しえいくほんず』(調布市)などなど。市民と一緒に編集を継続しているところ、いつの間にか終刊したところと分かれます。頁数、発行間隔はいずれも減少傾向です。

◆多様な視点からの問題提起

そして、女性の人権を多様な視点から考えるミニコミ。自分が当事者になった時、疑問や課題に出会った時には大きな力になってくれます。『たんぼぼ通信』(子宮筋腫・内膜症体験者の会)、『しんぐるまざあず・ふおらむニュース』、『ふあみりお』(家庭問題情報センター)、『Voice』(なくそ

◆発行者として
私自身、ミニコミ雑誌の『マイマイ族』を、いろいろ見えてくる女のミニコミ」と銘打って編集発行しています(84年創刊)。東京を離れて日本海側の地方都市で「よそのもの」マイノリティとなったことが原体験です。「家」や「ムラ」もリアルで、「嫁」の嘆きは超弩級。しかも恐ろしいことに、昔の『マイマイ族』を現在読み返しても内容が古く感じられない、という現実があります。21世紀に入ってバックラッシュの時代となり、作り手の高齢化と相まって、女性誌の休刊が相次ぎます。「男女差別を語る時代ではない」「性別を二分すること自体無用」と言われる今日この頃ですが、女性の問題は今でも山積です。夫婦別姓がいまだに実現していないことは、30年前には想像もできませんでした。自分を語る場、情報を共有し発信する場としての女性ミニコミにはまだまだ存在価値があります。身辺には秘密にしている内容でも、時として隠さず真面目に書くのは何故かと言えば、真面目に読んでくれる未知の読者の存在を信じているからです。このような情報のやり取りにこそミニコミの醍醐味があると感じるのは、私だけでしょうか? (鈴木美和子 運営委員)

アーカイブ多摩 日記

◆充実してきた資料棚

昨春から、月に数回、埼玉から会員のNさんが開館日に合わせてボランティアで通ってきてくれています。ご自身が会員等になって収集した約60団体の通信を継続して当館に持参・寄贈し、ご自身でデータの入力作業もしていかれます。これまで当館とは縁のなかった通信が多く、原発、国際協力(日中交流も)、平和・憲法などの書架が充実してきました。

◆ミニコミ収集しずつ

開館業務と資料整理に追われ、資料収集に関しては、ネットワーク・市民アーカイブとしてまだ積極的な働きかけができていません。「資料センターをつくる会」の時から資料寄贈してくださっている団体、協力団体

である、市民活動サポートセンター・アンティ多摩や、『市民活動のひろば』発行委員会に寄贈されたものを中心に収集・整理しています。少しずつですが、当館に直接寄贈してくださる団体も増えてきました。引き続き、よろしくお願ひします。

◆訪問・紹介続く

開館からもうすぐ2年になります。小さな資料館ですが、訪問や取材等、継続的に関心を持ち続けていただいています。15年度は社会・労働関係資料センター・連絡協議会、町田市立自由民権資料館民権カレッジ、東京自治研究センター、法政大学環境アーカイブズ、明星大学、一橋大学、十文字学園女子大学、チマチヨゴリ友の会などが訪問してくださいました。東京自治研究センター発行『るびゅ』には執筆記事が、『とうきょうの自治』には取材記事が掲載されています。

運営委員会など

10月16日 第7回運営委員会。参加者4人。会員・カンパ者報告、蔵書点検、見学対応、通信発送作業、緑蔭トーク役割分担、今後の企画、訪問者アンケート検討他。
10月24日 緑蔭トーク第4回開催。参加者16人。

11月20日 第8回運営委員会。参加者5人。会員・カンパ者報告。見学対応、原稿依頼、パンフレット、シンポ依頼対応、印刷機導入、総会講演会、緑蔭トーク検討他。
12月18日 第9回運営委員会。参加者7人。会員・カンパ者報告。ミニコミ寄贈団体確認、16年度休館日、印刷機利用、法政大学へデータ提供、年賀状、シンポ役割分担他。

1月11日 シンポジウム「市民活動サービスクォーター時代を知る」開催。参加者21人。
1月15日 第10回運営委員会。参加者7人。ミニコミ寄贈依頼、16年度活動方針等意見交換、パンフレット増刷、1/11シンポ反省、アーカイブ通信6号確認、分類番号について検討他。

訪問者の声

・多彩な資料があることに驚きました。時代の流れが今の形になったのでしょうか？
・モノ(資料)を持つていることは大変ではありませんが、大きな力かとも思います。次は蔵書構築の方針を絞っていくことでしょうか？
・どのような組織でも、残そうとした人、それを維持しつづける人がいなければ成り立たないですが、市民活動ベースでされていることはすごいことだと思います。
・分類はもつと少なく5分類ぐらいで充分だと思います。人と人をつなぐスペースとして活用される企画の緑蔭トークはとても良いです。
・本来は市の図書館が責任を持つべきものではないかと思いましたが、それが出来ないかというところは、それが現在の図書館の実力であり、弱点なのでしょう。その点、重く受けとめました。

カンパ等ありがとう

安藤鐘一郎、板垣恭弘、色川大吉、空木茜、梅田久枝、桜庭宏、杉原広子、高橋貞子、谷口郁子、町村敬志、横田順子、来館者の皆様(2015.10.2016.1)敬称略)

会員数(2016.1)

・126人(正会員63、賛助会員63)

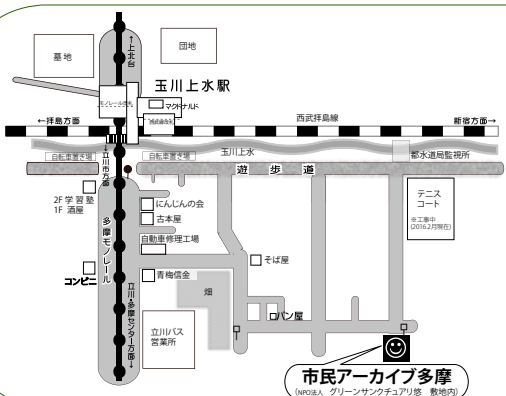
◆新規入会ありがとう(敬称略)

・正会員 鈴木清隆、三浦健

・賛助会員 谷合佳代子、山口美代子

編集後記

「ネットワーク・市民アーカイブ」の前身「市民活動資料・情報センターをつくる会」が発足したのが06年。気付けば今年は10周年。ゆっくりではありますが着実に歩みを進めています。これからも応援よろしくお願ひ致します。(江湯・増)



市民アーカイブ多摩利用案内

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(8月中旬・年末年始の休館あり)
- ・開館時間：午後1時～4時 ・入館カンパ：100円～
- ・所在地：東京都立川市幸町5-96-7
(多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南側徒歩8分)
- ・電話& fax：042-536-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ(通信や会報など)1400タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。
www.c-archive.jp